

## 白帆消ゆる間

著者	丁子
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 6 1
ページ	5 4 - 6 8
発行年	1916-06-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6610">http://hdl.handle.net/2298/6610</a>

## 白帆消ゆる間

委員 丁

子

いつの年とも知らぬ、何處いづこの海邊うみべとも知らぬ、唯白く破くる渚の波の帯のみが白鳥の羽かと思ゆる眞夏の頃の一日である。寄せてはさらさらと小砂の斜面を辿ひ登つて来て白い泡を残すともなく残して行く、砂の搖ぎ貝の囁き波は靜かに退いて忽ち秀でた嵩みに吸ひ込まれて終ふ。沖の帆影は動くとも見えず左手の岬の尖にかゝつて居る、「舟の行衛は何處にか」益槍した疑問に唆そとかされて砂丘の上に伸び上つた、「漂泊よ、漂泊よ、漂泊の暗示よ」我にもなくステツキは強く砂地をハタと打つ、「吾ならぬが現つる吾ぞ、我であつたら意氣地無し奴が」涼しい風、清き波、沖の帆影は少しく岬をはなれて來た「忘れし筈のありし世が偲おもはるゝも怪し、夙に露を踏んで山となく越ね、川となく渡り暮れては曠野に宿を求むるが吾の業ぞ」力も無くステツキは地を打つ、バツと起つ砂に、蟹の一つがコンコンと穴に隠れる、「見渡す限りの藍に漬れば清き搖藍の昔が浮ぶ、平和其者の表徴の、昔の頃が偲おもはれる」眞夏の光りはギラギラと輝いて沖の蜃うづがキラキラと其の頭を擡たげる眼も眩らむ三伏の猛威である、涼しい風は涼しい風ではない涼しい波もそふとは思はれぬ、「漂泊者フシヤウだ」ステツキを投げ出して身を燒け砂の上に投げかける、

自分は眞黒な道を手探ぐりに行き暮れた幻想イメーシヨの曠野に失はれた幻の殘像を追うて居る、其れは魔の住む池の黝くろき邊りである、苔に埋もれたシットリとした杉の闇路から一二町ダラダラ坂に導かれた池の澁の叢である、春立つ日に草は萌もえて葉櫻の影が池にポツト明暗の葉影さかさまげを倒さかさまに寫して居る、そして時々風もないのに散り

残りの花辨がハラリハラリ漂うて行く、それも、シットリした春の静けさに適はしい。

「もう春も過ぎたわねー」

クリーム洋傘が揺々と傾く、

「さうかしら」

腰を下ろした麥藁帽は不満である、常世迄もと神かけし歡喜の消へ行く姿が悲しまれた、有りと有る壓迫、不安、逡巡に押しつけたれて亡び行く戀の燈が心細かつた、

「いやさうでない。」

聲は自づと大きくなる、其の聲の波が静かな池の面に小波の囁きを傳へる様に思はれた。

「永劫の春よ」

洋傘は揺々と動いた、けれども返事は聞こえて來ぬ、

「ね、さうでせう」

不安は麥藁帽の心を襲つた、

「あなたが前から云つた事ではありませんか、何故返事を爲さらない人です、春は………春は永劫だ………と云つたのは誰れでしたか、あなたは今更裏切らふとするんですね」

「誰れが其んな事」

「分かつた、僕は分かつた」

「あんまりだわ」

「分かつたあなたは卑怯者だ」

男の聲は山彦の様、池の面がピリツと微動する、祠の扉にガンと響いて恐ろしげな婆さんがよろぼひ出でる其れにも女は氣が附かぬ、凝と池の面に眼を注ぐ、と見る黝い面は霞み渡つて來て搖れるわ、搖れる、魔の漣みが沸き立つて來る、而し其の眼は美しい、瞬きもせずに凜と張る、唯頬は眞青に變る、そして森の彼方の汀を氣狂ひ染みて行き來する男には少しの注意も拂はぬらしい。侮辱、嘲笑、罵詈、宇宙の萬象は彼れに酬ゆるに方に此れである、萬象は彼には皮肉の集團に過ぎぬ、萬籟は罵詈の怒號である、カット其の眞赤な口を聞いて百雷の様な笑ひの轟きを浴せかける、祠の婆が、大口開いた、あの杉の神木の恐ろしい幹の顔が笑ふ、池の魔性の漣も咣々と笑ふ、道の邊の蛇までも眞赤な笑ひ、物怪の笑ひ、………ステツキにクルクルと卷いた者がある、無意識の一振りに、池の波紋は一叩バツト擴がる、スート擦れちがつた者がある、愕として睨み付ける、と其の大きな顔は蜚の様、ゲラゲラと笑ひが物怪しく木魂する、「ゴーゴンだ」ステツキが颯と風を切る、………髪の乱れた姿が向ふから睨らんで居る、カット頭が火に燃ゆる、無暗に森の茂みを縫うた、又一ツの森を通り又三ツ目の森を過ぎた、

「何う爲すつたんだらう」

クリーム色の洋傘を杖にすんなりした、姿が若草の叢に立つ、青い頬、白い手、眞赤なハンケチが兩の瞳に強く喰ひ入る、

「惡かつた、私が惡かつたわ、許して頂戴」

大理石像の様な彼女の面影は薄霞んだ春の夕の池の邊り永く消え様ともしなかつた、時の流れは此のどんたくを夜てふ闇の扉に引き隠して終つた、そして橄欖の花に春を享樂する人生も皆同じ墓場に其の影を消すのである、時は流れる、音もせずに流れる、現在は過去と思へ、春は夏と思へ、分かつ切つた事よ、此んな自明な理は世にあるまい、而し分り切つた事が、一番分らぬ事相の片影なんだ、實に一瞬も生は止まらぬ、白蟻の隙を行く合ひ間も無い、さばれ實に春の頃を思へ、橄欖の花咲く春の頃を思へ、……………「悪かつた」と虚つき奴が、「許して頂戴つて」僕も以上の侮辱を甘愛する事は出来ぬ、森の男は消えた、古池の女も消えた、祠も消えた、そしてあのゴーゴンの婆の顔ばかりが最後まで其の紅色の口を開いた。其れもやがては識域の下に沈んで有りとする其場の光りは黒い闇の中にぐるぐると廻り廻つて無限の奈落に落ち込んで行く。……………バツト明るい電燈に煎付けられた其の夜の有様がまざまざと浮び出る、其れは吾と住む家の一部屋である、伯父の眼が光る、伯母の眼が泣く、それに、あの糸子の眼までが泣き張らされて吾に注ぐ、食後の果實のみが不安な團欒の卓上に置かれてある、

「もう此上は何も云はぬ、此家に置く事は出来ぬから其の考へで居てもらい度い」

伯父の眼は十六燭にキラツと輝く、

「まあ、あなたそんな事を此れにでも……」

「何に、云ふ事はない。」

聲は怒りに募る怒りに震ゆる、編物いちりに其の眼を隠して居た糸子の顔も「まあ御父さん」と云ふ表情に拘へられて母の顔、父の眼、それから又悲しき人の伏せた額に涼しい眸の流れを走らす、

怒れる人の坐を起つた後は死の静寂が邊を籠める。

「ねー實さん、ほんとに、御前の落度だよ學校の方にも知れたんださうです、それで今日も伯父さんが故意呼ばれて行らしたんですよ」……「糸さん、御父さんと呼んで居らつしやい」

伯母は靜かに見送つて送り出す様に言葉をついだ、

「あの様な事をして、……御前もよく臆へて居るだらう御前が此に連れられて來たのは七つと過ぎぬ頃でした、其れ以來、わたしは自分の兒より可愛がつて來たつもりですよ、恩を掛ける理ではないけれどもね、伯父さんだと一通りの心勞ではなかつたんですよ、それに御前は何んど云ふ事を、……尤も伯父さんだと御前を頼りに思へばこそ、あんな事まで仰つしやつたんですよ、いゝかね、其處の所を能く考へてね、決して短氣を起しては成りませんよ、伯父さんもあゝして銀行の頭取をなさる様に成つてから、世話や心配の種は増るばかりなのに、其れに頼みにして居らした御前までが今度の様な不始末を……。」

若き心に反抗の火の手はグツト胸元まで迫つて來る。「あなたには分らぬ事です」とは云ひ度いと思ひ、又表現し得る心の全部である。

「若い時の過ちと云へば其れまでの事だけれど御前の御父さんや御母さんの事を思ひ出せば思ひ當る事が無いでも無い、ほんとにね、其の當座は辛い苦しい事だけれども一春二春過ぎる中には後悔する様になるものさ、御前も此家にはほんとに大切な躰なのだから何卒短氣を起さぬ様に、いゝかね、實さん、……斯うして銀行家の中では五本の指に折らるゝ様になつたのに、それに後が確つかりして居ないと世間の外聞も惡いからね、分かつたらうね、……それに糸子の事も少しは……」

かなしとも忘れぬ愛の賜よ、らうたき娘のいとしさも誘はるゝ涙に募り来る、

「悪かつたと一言伯父さんに御仰い、いゝかね、唯これだけは、何うぞね……」

吾ならぬ吾身なれば反抗の焰は有りと知らず消え失せて情しき心に誘はれて云ひ知れぬ涙は泉とも湧き出づる、盡きぬ涙に慄ゆる聲を恐れてか答へ得ぬ。情けある人の心は汲むとも盡きね、唯理解されぬ悲しみがある、眞の同情は彼には無い、思へば深刻の侮辱なるよ、又來ん春に消ぬ可き矢瘡なりせば、炮烙の苦しきは吾に無い筈。永劫に残されし金瘡の呪ひに身を戦すれば病める心は狂ひ来る、友よ、友よ、唯只管に彼の情けある友の心と呼び起す、謂はゞ云へ、思はゞ思へ、吾を知るは吾と彼ぞ、友よ友、奈落に臨める心の苦痛ぞ、惡魔の惡魔の、我と我身の危くも危ふし。來れ、來れ、救へ、救へ、ゴーゴンの前に我ぞ座す、彼處に囁くは呪ひの聲ぞ、七首の光り斧の軌り、呪ひは闇と迫り来る、心は暗く渦と卷き、夜の龍壺の泡沫の如、あらぬ恐れの新と衝く。春の嵐の絶間なき騷擾は宵の口より甚しく、戸の轟き煙突の唸り、叩く音、突く音、罵る聲、叫ぶ悲鳴、嘯く笑ひ、漂ふ血潮、魔城は忽然と吾の住む其者である、「實實」怪しの聲が煙突に囁やく「友よ、友よ、吾待つ友か」闇と騷擾は一瞬の燈と一頃の靜溢をも容れぬ、立つ人の姿、よろよろと立つ人の面は物の怪の術とも見ゆる、驚く人の叫びには恐るゝ恐れの声がある、聲に誘はれ走せ來る人も既に恐怖驚愕の像と化する、血潮の嵐は魔城に渦卷いて春の嵐と呼應する。「發作か、發作よ」嵐に囁やく聲がある、人世は儚きものよと常に云ふ、分かり切つた事よ、針に一點を支さへらした球に譬ふれば譬へらるゝ、かも知れぬ、敏感の者よ、一寸の搖ぎに球は落る、其が卵石ならそれつ切り、それが護謨毬なら其儘御陀佛とはなりはせぬ、分かり切つた事よ、意識らしい者が闇に動いて闇に消ぬる、又嵐奴が吹き募つた遙かに曠野

を迷つて行く、早く、早く、野邊の蘼華草を踏みしだく、芽を出したばかりの春の若草も踏みにじる、早く早く、鳩の一飛びより尙早い、「早く早く」と手を引く怪しの者が云ふ、あの泉まで、泉まで、幸福の涌き出る泉まで。面おもても見せずあらぬ方に向けた儘深紅の衣に身を装つて居る、唯其の手は恐ろしく軟かく奇麗だ、空腹、飢渴、焦慮、憧憬のあらゆる苦悶が身を驅つて行く、泉へ泉へ……忘れ得ぬ歡喜祝福もて泉は吾と吾が道伴者を迎へてくれた、味はふ水は此の世の者ではなかつたらう、春酖たけなの香りして名も知らぬ花が笑ふ、眞白な小鳥が泉に姿を寫し見て嬉々と歌ふ、春よ春、永劫なれ、萬象の祝福に唆かされて「永劫なり」と強くも云つた聲がある、變化は方に一瞬である、玉子は針の尖を滑べつた、幸福と永久のバンドにあらんと欲する者は愚者フーカである、愚者は泉に落こつた、それが生憎護謨毬でない、變化は一瞬に起る、玉子は割れた、春の萬物は消えて邊りは燒熱地獄の態となる、泉は吐き度く成りさうな溝である、但も氷が一坯に張りつめて居る、同伴者は惡魔であつた、眞赤な笑ひを笑つて止まぬ、奈落だ奈落だ、永遠の呪の氷だ永劫の春の本体は此れか、愚者が取殘されて濁水の氷の中で腕うでいて居る。そして侮辱、背信の憤恚おのゝきの戰に震へた、……

「もう大丈夫だな」

現實の聲に現實の生命を吹き込まれて吾なる吾にふつと歸つて來る、伯父の聲だ、

「まあ兄さんが」

ワツと清い泉が流れる、糸子の涙だ

「泉だ、これがほんとの……」

「まあ實さん確つかりなさい」



「兄さん……」

戦く手が僕の手と思ふ手を握る、紅衣の魔性の其れよりも軟らかくて温情が籠る、

「何うだね、もう大丈夫だ、随分心配したよ」

現實の聲が鮮やかになる、そして其の眼は凝と自分の眼を見詰める、六ツの眸が僕を見る、そして互に見交はして、又も我眼に注ぎ来る。六ツの皆んなに清き泉が輝いて居る、其れを凝つと見返して居る中に急に軟らかな、温かい悲しみの情が急に込み上げて来て、泣くまいと制せぬ涙が涌いて来る、

「も大丈夫」

と今度は伯父のハンケチが自分の涙を拭つてくれる、そして靜かに慰藉の沈黙を以て悲しみの靜まるのを待つて居る、口には藥があてがはれた、

「今日は何曜……」

六ツの眼は聲に喜ぶ、そして糸子が莞爾笑つて答へを自分の者とした、

「日曜日よ」

僕は驚いて眼を見張つた、吾と吾ならぬ自分を三日も経験しようとは、事は泉の幻よりも不思議である、生！今が生だ、昨日はきのう一昨日はおとこひ、思はず吃驚して身懷ひする、

「それぢや俺は出て来るから……」と伯母に云ひながら、「安神して寢ておいで決して心配する事は無いから」と凝と僕を見詰めながら太つた牀を優さしく靜かに動かした。

針の尖ども尖れる神經は又も涙を唆はれた、そして神に縋らん藁をも掴まんとする心細い悲いしみが涌いた、

「糸子……」

純潔な心に觸れて慰められたかつたのだ、

「何あに」

伯父を送るふとした糸子は直ぐ小走りに歸つて來た、

を「何あに、

と、優しい頸<sup>うなじ</sup>を傾むけてあどけない、頬で笑つて、慰める様に枕元にピタリと座つた、其の求める様な清い眼見て又悲しみが高まつた、

「僕が悪かつた、許し……」

糸子の純潔な顔は急に悲痛の曇りに汚されて、ワット泣き臥して終つた、

溫かい春の日は明け放たれた障子の間から覗いて居る、月山の楓の若葉は明るい青みを池の清水に映して居る、池は泉とも見えた若葉は橄欖の香りかと思はれる、總ては皚月<sup>すべ</sup>の朦朧の中に包まれて薄暗い闇が邊りを閉ざして終ふ、

早くも夢の現つたの態である、

「何處ともなく聲するは神が事か」

小春の日影をよと搖ぎ聲する方が明るく成る。

「呪はれたる者よ……なれが事ぞ」

呪はれし者は落膽<sup>だつち</sup>して薄闇に幻の聲を探る、

「聲する方が眞まことや、香かりする方か……」

幽巖の森に木魂ここんして山から谷、谷よ水流るゝ聲は琴瑟の囁ささきと和する、山と見る蜿蜒えんえんに轟ととくよと見れば幽冷なる森の清水の囁ささきと變る、散り布く秋の紅葉とも見ゆるは青い鳥、赤い鳥、の壽もく々森間の行き交ひぞ。百もも轉まがりが神の御聲か、神の御聲が鳥の聲か。

戀は盡くとも恨みは永し

なかめせしまに有りて世の、憂き吳竹の節近み、

歌ひつ飛びつ行き交ふ鳥の目眩めまぐるししい、聲は一段と健く歌は一段と早く成る、

生みの人母垂乳根ぞ

なれが世に呪生みける、春の邊の永劫なれと花笑ふ。

盡せぬ泉の影濁り

紅衣の乙女の瞳さへ、永劫なれと氷に注ぐ。

柳の囁きか鳥の聲か

「南の口の海の邊に

藍の衣の山もある」

「泉もあつてか」

「岩もある」

「行かば」

「行け、藍に問へ」

鳥の囁き神の御聲。

底ひなき池に魔の住む

都の花のそよと散る、呪の蛇の波ぞ起つ。

調子は一段と迫つて来る、

「堇の衣の乙女ごち

巖の藍に波の散る、」

「堇の衣の乙女とは」

「南の海の砂いさごに問へ」

唯颯々と風のみが松に音して過ぎて行く、

瞬間の意識は波に消えて幻しの國はぐるりと廻る、幻らしからぬ幻は友の聲、女の聲、誰彼れの聲に始まる、

「何うだね今日は」

ガストの友は優しく云ふ、

「今日は六月はつきの十五日海邊は嘸かし涼しからう」

南の國の藍を思ひ、巖の藍、堇衣の乙女、疑ひは心を掻き乱して終ふ、答へる聲も物憂氣に見ゆる、物思ふとも無く思ひたる風情である、眞の心の友なれば憐れとも見ん、悲しとも見ん、慰め顔も自から裏切る。

「何事も心に掛けぬがいゝ」

取つて付けた様に口を切る、話したい心ゆくばかり話したい、そして失意の友を慰めてやり度い、心はあつても言葉に出ない、言葉は出ても心が出ない、去る年の御山の雪の頂き籠めて谷間を閉ざす其頃から友の心は悲觀のみであつた、溶かせる玉と澄める心も浮き沈みの定めぬ波に弄ばれた、夕されば歡喜らしき不安に戦きつゝ恐ろしき人の憧憬に漂ひつ、黑白も知らぬ闇の深みに落ちて行く、雪降る夜の一日の極印の如くに額に焼き付く、丸木橋渡るたをやめ見る心地、禍なかれ、幸あれかし、時には逆ひし諫言も出た、……魔性の者ぞ、大理石の膚に紅の流れる、水ぞ、水の秋こそ眼は語らめ、血を啜る妖女の舐る舌と唇は丹い、唯丹しとも丹い、圖体の知れぬが彼女が性ぞ。徹宵の舞踏會に裳裾を波と搖がし、伴奏の高誦に玉を轉ばす、高き樓の低からぬ身の程に恐ろしき森の精と心が潜む。雪の夜の一日、去る年の夢路に失はれし友の面影が朦朧と浮んで來る、清水と流るゝ切れ長の眼の純潔に迷ひし濁れる眸は魔性の輝きである、秀でし眉に闇の曇りを一刷けかける、羅馬の人の豊かな頬に血潮に染むる汚れを刻むのである、輝きと流るゝ青春の血潮を魔性は既に吸ひ取つた、……眼を邊せば寢ねたる人の頬は青く眼は赤い、魔性だ、寢ねたる友が魔性になつた、疎然として吾知らぬ戰慄に戰く。

「兄さん」

呼びかけた糸子は魔に襲はれた態である。

「學校からの御手紙が來てよ、御覽になつて、」

運命の暗示に友も吾も愕然と戰いた、既に恐怖其者の像である。

恐怖は驚愕に變つた、驚愕は失望である、失望は像其者だ、……落膽、憤懣、慙愧の廳が荒れる、巴と心

を駆けつて縦横に心の壁を衝き壊す打撃の暴威が心に飛び込む、有りと有る若き日の憧憬は夢の現つと消へてしまい、灰色な沈顔と強暴な自棄のみが忽然と吾影を焼き付ける、心ある友垣、優しき家庭ホーミの温潤リフレッシュメントに翻らんせし我心を残酷にも消えよとばかり黒き運命の手が導き行く、俯仰天地に恥ぢざるは吾心事である、譎詐、卑怯、醜惡の恥づ可きなし、人と謂ひ人と住す、人生を了解せざる者は人でない。

罰と云ひ條、罰でない、斬魔の劍では尙更無い、心は常の心でない吾は早くも吾でない、嗚呼斷頭機イロツティンの轟きが、首が飛ぶ、血潮が流れる、此れは夢でも夢でない、現つうつの態と思はゞ思へ。

恐ろしき惡魔がギロツティンの綱を持つ、邊り憚からぬ鼻歌に闇の中なる野山までがビリツと慄ゆる。

首を斬るのが愉快なものか

罪が二八の娘なら

「何に容赦はせぬぞ」手が緩むと綱は滑々すべと延びる。

バツト陰惨な火花が飛び、鈍重な響がドシンとする。五つの首は宙に舞ひ上つて其れの一つは機の添木の傘をガツシと噛む、齒が恐ろしく白く眼は最後の反抗の憤懣に輝く、首なしの躰からゆくゆくと流るゝ血潮は地を紫に染めて行く。

「これで今日も無數の佛が出来たかな」又も運命の綱を手繰り寄せる。

生かす殺すは刃物に間へよ

緩めぬ綱は俺れのもの

運命は絶滅の高頂に其の劍を上げる、搖々と簪が燃えて惡魔の顔は血で染まる、染つた筈の刃は眞青に中天

の星に輝く「今晚は後一匹」か

「思ひ切りの悪い顔を仕やがる」

命乞ひなら星でも睨め

緩めぬ綱は俺の者

キラット星に輝いたは星の流れか刃の色か。

星は悉皆を知つて居る、正直者が亡んで行く、謫詐の狐の舌のみ赤い、愚かしきゲリヒトの剣よ或時は正直のを好んで斬る、批判は方に無茶に過ぎぬ、天恵の兒すら憤死する例がある、罰の惠與も當にはならぬ、眞者眞面目が馬鹿を見る、此んな事は星の知つてゐるほんの一部分だ、知つてゐるだけを打ちまけたら人間世界は大洪水以上の騒ぎだ、寫眞の原板の様な事相の影を裏切るだらう、又は二分白粉の剝けた顔にも譬へられる、濃くて白かつた所は餘計黒い筈だ、程の高い虫けらはど周章狼狽に相違ない、所が星は粹な者よ、昔此方白粉の裏の鼠色を能く御存知だ、程の高い虫けらの迷惑も察して居る。

齟つて居るのが勿怪の幸い、益々詐が跳梁する。

冬の月とも凄き顔の丈夫が、今度の番に首を戴せる、觀念の口元に無念の嚙の形相である、總てが無念と觀

念の表情である、我と我身の死なば死ね、殺さば殺せ、野邊の望を肥やすが有りし世の無慙の因果か、因果なるが故にか、何が故の因果か、觀念は煩悶の表情と變る、死するは何が故ぞ、殺すは何の故ぞ、現つ世の假りの現に逆らふ故か、逆ふを罰せんが爲めか、見せんが爲めに罰するが爲めか、無念の表情は方に極度の苦痛の表情である、……煩悶と苦痛と……苦痛と煩悶と、麻と亂れて心にもなく反抗の睚眦を迸らす、情なき

聞も同情の心にてか涙に曇る憐れさを示す。

搖々ゆゆしくと篝火が燃ゆる、惡魔の男は血潮に塗つた顔を突き出す、頸が乗つたか否かを見定める爲めと見ゆる、星の光が月に差し込んで青い睨みは惡魔の眉間を聳と射る眼の當り死を想ひ神に捧げた刹那の眼より洩れた最後の反抗の矢が射られたのだ、血潮の男も遂々たじくする、星が真理の輝きを打ちまけた瞬間の強迫に恐れたのだ、星も此の不運者ウネセリゲンに一掬の同情を垂れたのかも知れぬ。

「此この男は聖者セイセントである、若しも汝が正直を以て其の要件とするならば、彼は方に聖者の第一人である」真理の聲は血潮ライヒテルの男の心に湧いたのか、將た、耳に囁やく星の眞心が有つたのか、「誰れも知らぬぞ、今の間に」  
「よし來た、面倒だ」是れは方に彼自身の聲であつたらう、其の刹那に血潮の顔は惡鬼羅刹の夫れで有る。

刃の光り、刃の響き……………。

星もキラツと輝いただけで口を永遠に噤ぐんで終ふ、血潮の顔のみ夜目に赤く世界一杯に擴がつて、やがて、濃い、闇の中に消えて終つて唯陰慘な風のみが鼻を衝く。

陰慘、無念、悔恨、から現つる吾に歸つて來る、唯殘るは夢想らしからぬ夢想である、岬の白帆はもう見ないで薄黒い黄昏の霧が迫つて來る、渚の浪の白い一列の崩るゝ音はばりばりと荒布を裂く様に思はれる、黒い藍の海の水、淡紫うすむらさきの岬の山、は已に失はれた一日の反映である。

「漂泊よ漂泊よ」

幻の悲哀に海邊の夕を見やりつゝ、ステッキは力なく砂丘を南の巖いわはへと下つて行く。

(完)